



国語， 数学， 理科(化学， 生物)問題

はじめに， これを読みなさい。

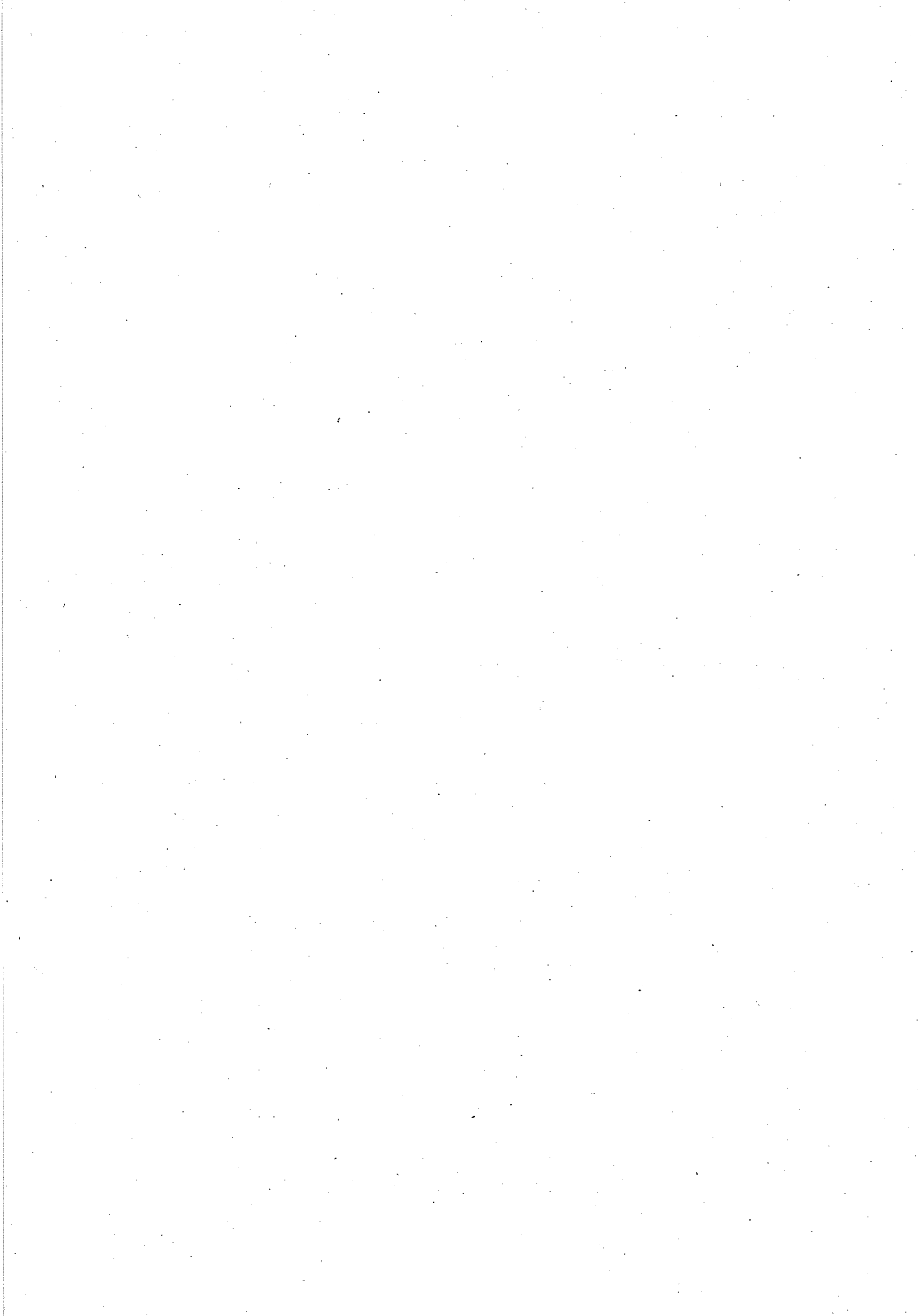
1. これは， 国語， 数学， 化学， 生物の4科目の問題を綴じた冊子である。必要な科目を選択して解答しなさい。食料環境政策学科受験者は「国語」が必須である。
2. 問題は， 数学， 化学， 生物については表面から69ページ， 国語については裏面から19ページある。ただし， ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
3. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか， 受験票と照合して確認すること。
4. 監督者の指示にしたがい， 解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
5. 監督者の指示にしたがい， 解答用紙にある「解答科目マーク欄」に1つマークし， 「解答科目名」記入欄に解答する科目名を記入しなさい。なお， マークしていない場合， または複数の科目にマークした場合は0点となる。
6. 解答は， すべて解答用紙の所定欄にマークするか， または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答番号は各科目の最初に示してある。
7. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
8. 解答は， 必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入のこと。
9. 訂正する場合は， 消しゴムできれいに消し， 消しくずを残さないこと。
10. 解答用紙は， 絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
11. 解答用紙はすべて回収する。持ち帰らず， 必ず提出すること。
12. この問題冊子は必ず持ち帰ること。
13. マーク記入例

良い例	悪い例
	

国語問題

はじめに裏返して表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. この問題は19ページあります。
2. 解答番号は1～17, 101～106, 201です。
3. 数学・化学・生物は裏面から順にあります。



国語

(解答番号は1～17、101～106、201。記述式の解答は解答用紙に横書きで記入すること。)

〔I〕

次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。解答番号は1が

101

、2が

102

1 民主制のヘイガイが現れる。

2 常識をクツガエす。

〔II〕

次の傍線部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。解答番号は1が

103

、2が

104

1 郷里を出奔する。

2 懇ろにもてなす。

〔III〕

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

1 「この分厚い本を¹読んだけれど、情報量は少なかった」というほやきを耳にすることは少なくない。分厚ければページ数も文字数も多いから、機械的に処理される記号の量つまり「データ量」は当然多くなる。だから、このほやきにおける情報量とは、データ量とは異なるものを指しているはずだ。平たくいえば「この本の内容は、全然わからないことか、もう知っていることか、どちらかだったので、役に立たなかった」と述べているのである。つまり、ここでいう情報量とは実は「読み手にとっての意味内容の量」に他ならない。まったく同じ本を別の人物が読んで、「ああ、本当に面白い本だった、刺激をうけた」ということも十分あ

るだろう。データ量は同一なのに、読み手によって、うけとる意味内容の量はそれぞれ異なるのだ。つまり、「意味」とは個々の主観世界のなかの存在であって、客観的に計量できるような存在ではないのである。人間にとって大切なのは「意味」のほうで、それは0/1の機械的なデジタル信号の量(データ量)と直接関係しているわけではない。「無意味」なつまらない文章をいくら大量に読んでも無駄なのだ。

「情報の海」というとき、われわれは、いったいそれがデータ量の増大を指しているのか、人間にとつての意味作用のありさまを指しているのか、よく考えなくてはならない。情報学を専攻する大学院生でさえ、両者をよく混同する。たとえば「今のパソコンは動画映像を自由に扱えるようになったので、人びとにつたえる情報量が一挙に増した結果、社会的影響力がはるかに増した」などと書く大学院生がいるが、ここには、情報学的に初歩的なミスが含まれている。

巨大スクリーンでつまらない映画を観てもすぐ忘れてしまうが、たった一七文字の名句にふれて人生が変わることもある。両者はまったく別物である。だから、われわれをとりまく情報環境におけるデジタル・データの急激な増加が、必ずしも濃密なコミュニケーションをもたらすとは言い切れない。大同小異の娯楽映像や騒がしい宣伝コピー文句ばかりが氾濫するなかで、共感できる意味内容はむしろ貧しくなっていることはないのか。われわれは心の底で、日常世界の片隅で発せられるホンモノの言葉の重みを求めているのではないだろうか。

端的に言えば、「意味」とは本来、個々の人間主体にとつての「価値・重要さ」である。情報は意味作用をもっているが、解釈するのはあくまで人間なのだ。情報は物理的パターンの形で脳や、書物や、データベースのなかに蓄えられるにせよ、意味³価値をそれと単純に同一視する学生は、赤点で落第となる。言葉のいわゆる辞書的な「意味」はやや客観的な感じがするが、実はこれも二次的に派生した性質にすぎないのだ。

情報を受けとると、心のなかには何らかの意味作用が発生する。自分にとつて興味深いもの、刺激的なもの、重要なものが、意味作用発生のプロセスで自然に選択され、重要でないものや既知のものは、すぐに忘れられてしまう。あるいはもともと認知作用から抜け落ちてしまう。この選択をおこなっているのは、意識というよりむしろ無意識であり、身体である。くだらない例

だが、一夜漬けで丸暗記した試験勉強の知識はたちまち消えてしまうのに、全身が震えるほど感動した音楽の響きはいつまでも記憶に残るものだ。

ここで大切なのは、意味作用と関わるのは人間だけではないということである。イヌやネコも、餌、敵、異性などを諸々の知覚(触覚・味覚・嗅覚・視覚・聴覚)で認知し、敏感に反応するが、これも立派な意味作用である。身体こそが意味作用発生の原器なのであり、身体をもつ動物は、それぞれの種に特有の意味作用をもとに生存活動をつづけている。

あらためて「意味」と生命活動の関係をとらえ直してみよう。どんな生命体も、生きるために「有意味な対象」を認知し選択するという行為をおこなっている。たとえばカエルは、黒い小さな飛翔物を、餌のハエだと思つてとびつく。もしそれが本当にハエだったら、その選択はただしく、カエルは栄養物を摂取することになる。このように、「意味」⁴とは、選択行為とともに事後的に出現するものなのだ。カエルは、過去にとらえたハエのパターンの記憶にもとづいて目前のハエを認知し捕捉する。それがまた記憶される。こういったカエルの自己準拠的・再帰的な行為とともに、「意味」⁵が循環的に出現することになる。飛翔物をただしくハエだと「意味」づけたカエルは生き長らえるだろうが、ゴミばかりにとびつくカエルはやがて死んでしまう。要するに、「意味」とは本来、生命体の生存活動と不可分の存在なのだ。

人間の心に生じる複雑微妙な意味作用も、この生命活動の延長上にある。たとえば読書をしているとき、われわれは、自分の記憶している言語的な概念にもとづいて文章の意味を解釈する。そしてその解釈が自分の記憶にフィードバックされ、記憶のなかの言語概念も刻々と変化していく。読書体験とは、そういう自己準拠的・再帰的・循環的なプロセスに他ならない。

そもそも、動物と人間を峻別することは古臭い思想で、二一世紀の今日、もはや科学的とは言えない。西洋人文学の伝統である人間中心主義思想は、現代の生態学やネオ・ダーウィニズムによって実証的に否定された。一七世紀の偉い哲学者デカルトは、理性をもつ人間だけを特別扱いし、残りの動物は機械的存在だと考えたらしいが、なんとこの不遜な思い込みだろうか。今やそんなことを信じている生物学者や脳科学者は誰もいない。われわれ人間も、イヌやネコやサルと同様、共通の祖先である原始的哺乳類から枝分かれし、徐々に進化してきた動物の一種なのである。ペット愛好家なら、機械とちがつて動物には愛情表現

があると賛同してくれるはずだ。確かに、意識的な理性をもつ動物はたぶん人間だけだろう。だが、そのことはむしろ逆に、われわれの思考の大部分が無意識的な身体活動にもとづいており、意識的な理性にもとづく判断など、大脳新皮質でおこなわれているごく一部分にすぎないという冷徹な事実を示唆するのだ。

IT(情報技術)は日夜進歩している。だが、同様に情報処理をしているようでも、コンピュータと人間とのあいだに、本質的な違いは歴然とある。身体がなく、生きているわけでもないコンピュータの内部に、人間のような意味作用が発生し、喜怒哀楽の感情が出現することなど、鉄腕アトム好きの見果てぬ妄想である。コンピュータとは、人間が外部から与えたアルゴリズム(算法手順)にしたがって論理記号を操作し、人間の意識的な思考を高速で模擬するシミュレータであり、それ以上でも以下でもない。いかに有用でも、原理上の限界があるのだ。だからこそ、ネット集合知を実現するときも、ITを過信せず、有効に活用するためのいっそう精密な思索が不可欠となるのである。

生命体も機械も「システム」である。システムとは、互いに関連する多数の構成素からできていて、何らかの作動をおこなう存在だ。実は生命体と機械がシステムとしてどう違うかについては、昔から学問的論争がつついてきた。そして、両者の相違をわざわざ示したのは「オートポイエーシス(Autopoiesis)理論」である。これは、チリの生物学者ウンベルト・マトウラーナとその弟子フランシスコ・ヴァレラによって一九七〇〜八〇年代に提唱された驚くべき理論だ。九〇年代に入ると科学哲学者河本英夫によって日本にも紹介され、それ以降かなりの注目を集めてきた。ただ、科学理論といっても哲学的で用語も難解なので、ひろく社会で理解され受容されているとは言えない。だが実は、その本質はあつげに取られるほど簡明なのである。

「オート(auto)」とはギリシア語で「自己」のこと、「ポイエーシス(poiesis)」とは「制作」のことだ。だからオートポイエーシスとは「自分で自分をつくること」に他ならない(「自己創出」などと訳されることもある)。生命体が自分で自分をつくりあげるシステムであることは明らかだろう。われわれの脳細胞も、脳細胞からできあがる。脳のなかの記憶もまた、過去の記憶をもとに更新され、蓄積されていく。そこには自己準拠的・循環的な作動がぐるぐるとして繰り返されている。誰かが設計図を引いて、外部から所与の機能をつくりこんだわけでは決してない。だからいくら研究しても、生命体の再生産機構には神秘的な謎がのこる。一

方、コンピュータのような機械システムは、基本的に、人間が設計図を描き、電子回路を組み立て、外部からプログラムをつくりこんだ存在である。機械は自分で自分をつくることはできない。このように、他者によってつくられること、あるいは他者をつくりあげられることを「アロポイエーシス」という。「アロ(allo)」とは「他者・異物」のことだ。機械は自分自身をつくれぬが、人間に役立つ何かを出力生産する。生命体である人間は「オートポイエティック・システム(autopoietic system)」、機械であるコンピュータは「アロポイエティック・システム(allopoietic system)」というわけだ。

オートポイエティック・システム(生命体)とアロポイエティック・システム(機械)の最大の相違は何か。——前者は「閉鎖系」なのに後者は「開放系」だということだ。

つまり、システム論的になると、生命体は閉じているのに、機械は開いているというわけだが、これは少し不思議な感じもする。まず、コンピュータのような機械システムが原理的にオープンだというのは当然だろう。入力データが外部から加えられると、コンピュータは、あらかじめプログラムがつくりこんだメモリ内のプログラムにしたがってデータを処理し、出力データを生み出す。その機構は明快に分析できるし、完全な開放系に他ならない。一方、生命体である人間は、外部から光や音などの知覚情報を受けとり、それを脳神経で処理して、何らかの行動を起こす——このように見なすと、コンピュータと大差ないように見えるかもしれないし、実際、二〇世紀半ばの古典的サイバネティクスではそう考えた。

しかしよく考えると、両者のあいだには大きな相違がある。われわれが音楽を聴いたり、絵を観たりしたとき、それを身体内でどんな機構で「処理」しているのかは解明されていない。同じ曲や同じ絵でも、受ける印象は個人によって千差万別だし、同一人物でも、体調や気分など種々の状況によって、感動したりしなかったりする。他人がつくったプログラム通りに鑑賞しているのではないのだ。そこにまず、閉鎖性につながる不透明性がある。

実はこの不透明性が、オートポイエーシス理論提唱のきっかけとなった。創始者マトウラーナは、ハトの目にいろいろな波長の光を当て、視神経の反応を調べていた。ところが、実験の結果、波長と視神経の反応のあいだに、はっきりした因果関係を見出すことがどうしてもできなかったのである。たとえば赤い光を当てたら視神経のこの部分がこれくらい興奮する、といった明

快な結果は全然えられなかった。もしハトが機械だったら、辛抱強く調査すればそれなりの因果関係を見出すことはできるはずだが、いったいなぜ駄目だったのか。——マトウラーナの出した結論は「ハトの視神経の反応は、過去の体験や記憶にもとづいて内部的に決まってくる」というものだった。外部から加えられる光は、単なる刺激にすぎない。ハトは刺激をうけて独自のやり方で反応するが、内部で自己準拠的に作動しているだけなので、外部からはうまく説明できないのである。

要するに、ハトは徹頭徹尾、動物行動学の鼻祖である生物学者ヤーコブ・フォン・ユクスキュルのいう「環世界(Umwelt)」つまり主観的な世界のなかで生きている。その世界は、ハトの生存体験をつうじて a 的に内側からつくられるものであり、外側からの指令で b 的につくられるものではない。だから「閉じている」のだ。

閉鎖系であるオートポイエティック・システムには、開放系であるアロポイエティック・システムと違って、明確な入出力関係がない。したがって、外部からその作動を正確に予測することはできない。要するに、ある刺激に対してどう反応するか、よく分からないのである。これは人間の心を思いだせば、誰しも納得するだろう。同じことを言っても、いつもは笑いだす恋人が急に怒りだすこともある。人間はそれぞれ主観世界の住人で、コミュニケーションが常に成功するとは限らない。

先日、都心でクルマがビュンビュン往来するなか、赤信号の横断歩道を平然とゆつくり渡っていく中年女性がいたが、その目はどこか遠くを見つめ、急ブレーキの音も耳に入らないようだった。彼女の心中は、彼女以外には誰にも分からない。こういう閉鎖的な不透明性は、複雑大規模なコンピュータにやどる暗部とはまったく異質なものだ。入り組んだプログラムの動作分析はただ面倒千万だけだが、人間の心の謎は永遠にかぎりなく深い。

むしろ、生命体の内部に何らかのルールがあると仮定し、その反応をある程度予測することは可能である。多くの生物学者はむしろそのルールを見出そうとしているとも言えるだろう。だが、そこでの「ルール」は、外部からつくりこまれた明確なプログラムとは根本的に違う。生命体が自己準拠的・循環的に作動していれば、おのずと習慣性が生まれ、まるでルールにもとづいて作動しているように見えるのである。環境条件が同じなら、習慣性にもとづいて同じ反応を繰り返すかもしれないが、環境条件が変われば、生存するため新しい反応をつくりだす。それが生命体というものなのだ。つねに変化する環境条件への驚くべき適

応が、生物進化をもらしてきたのである。

(西垣通「ネット社会の「正義」とは何か」より)

〔註〕

○ネオ・ダーウィニズム……生き物の偶発的な遺伝的変異に自然淘汰が作用して進化が起こるという学説。

○サイバネティクス……生物と機械における情報通信と制御作用の構造を統一的な視点から研究する学問。

問一 傍線部「この分厚い本を読んだけれど、情報量は少なかった」とあるが、ここで言う「情報量は少なかった」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

1

A 普遍的な内容に乏しく、時間が経つと薄れていくような内容であるということ。

B ページ数という物理的な量に対して、データ量が少ないために内容が薄いということ。

C 文字数が多いが、視覚的なデータが少ないので内容が理解しにくいということ。

D データ量が多いが既知の事柄が多く、刺激されるような内容に乏しいということ。

E 人によって面白さが異なるような内容であり、客観的な情報に乏しいということ。

問二 傍線部2「ここには、情報学的に初歩的なミスが含まれている」とあるが、ここで言う「初歩的なミス」に該当しないものは

どれか。次の中から一つを選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

2

- A 意味のある情報と無意味な情報とを峻別しゅんべつせずに情報を論じること。
- B データの量だけに着目し、その価値を考慮しないこと。
- C データ量の増加がそのまま社会的影響力の増加に直結すると考えること。
- D 情報量が多いか少ないかを、主観的な判断により評価すること。
- E データ量を、受け手にとつての意味内容の量と同一視すること。

問三 傍線部3「それ」が指すものを本文中から抜き出して書きなさい。解答番号は

105

問四 傍線部4「意味≡価値」とは、選択行為とともに事後的に出現するものなのだ」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 3

A 「意味≡価値」は、生存活動の成功と記憶の蓄積を通じて、たゆまぬ努力の結果として生み出されるものであるということ。

B 「意味≡価値」は、生存のために必要なものごとを識別するという活動の結果として、個々の主体によって形成されるものであるということ。

C 「意味≡価値」は、進化の過程を通じて認知作用が発達した結果として、身体を持つ生き物によって獲得されるものであるということ。

D 「意味≡価値」は、もともと生命体に備わっているものが、試行錯誤のすえに開花した結果として出現するものであるということ。

E 「意味≡価値」は、身体の要求に従って行動するという生存活動の結果として、世界から学び取られるものであるということ。

問五 傍線部5「自己準拠的・再帰的・循環的なプロセス」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 4

A 本能として自己に備わっている言語能力によって読書が行われ、その読書体験によって言語能力がさらに高まる、という能力向上の過程。

B 様々な文章の解釈を通じて自己の言語概念を再認識し、その正しさを確かなものにしたたり、必要な修正を加えたりする、という言語学習の過程。

C 自己の記憶や理解にもとづいて行為が起こされ、その結果によって記憶や理解が改善され、次の行為の基準になっていく、という反復的な過程。

D 受け取った情報を解釈することによって意味作用が発生し、そこで発生した意味に応じて解釈の正しさが認知される、という自己評価の過程。

E 既存の言語概念にもとづいて文章の意味を解釈し、得られた理解を記憶として蓄積し、開かれた言語世界を築き上げる、という言語使用の過程。

問六 傍線部6「いかに有用でも、原理上の限界があるのだ」とあるが、ここで言う「原理上の限界」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 5

- A コンピュータは高速で情報処理をすることができても、機械である以上、理性にもとづく判断を下すことはできないということ。
- B コンピュータは所与の手順に従って命令を正確に履行することはできるが、そのつどの情報に応じて柔軟に対応することはできないということ。
- C コンピュータは情報を素早く処理することはできても、コンピュータ自身にとってその情報の意味や価値が発生することとは決していないということ。
- D コンピュータは外部からの入力情報に合わせて自己を制御することはできるが、出力する情報を意志的に統制することはできないということ。
- E コンピュータは所定のプログラムに従ったものごとを判断することは得意だが、そのスピードは機械の性能に制約されるということ。

問七 傍線部「アロポイエティック・システム」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 6

- A 自らの手で自分自身を構築できず、外部から与えられた指示や目的にもとづいて作られた、他者進捗的なシステム。
- B 内部の機能が可視化されており、その明瞭な仕組みのもとで情報処理を行い、他者に貢献しようとするシステム。
- C 外部情報を機構内に取り込めるという開放的な機能を備え、外部との交流を通して有益な生産活動を行うシステム。
- D 外部と接続して感情のパターンを取り込み、これを処理することで、疑似精神的な仕組みを作り上げるシステム。
- E 生き物のように主体的に活動するのではなく、人間の役に立つという外的な必要性に迫られて構築されたシステム。

問八 空欄 a と b に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマーク

しなさい。解答番号は 7

- A a | 意識 b | 無意識
- B a | 無意識 b | 意識
- C a | 有機 b | 無機
- D a | 無機 b | 有機
- E a | 自律 b | 他律
- F a | 他律 b | 自律

問九 傍線部8「閉鎖的な不透明性」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 8

- A 人の心は機械のように目に見えるものではないので、刺激に対する反応を通じてしか理解できないということ。
- B 人の心は意識よりも無意識によって動くことが多いので、外部からはうまく説明することができないということ。
- C 人の心は機械とは違い、複雑かつ不安定なので、その分析に膨大な手間ひまがかかってしまうということ。
- D 人の心は常に主観的なので、時として他者からは理解しづらく、閉鎖的な世界観の中に埋没してしまうということ。
- E 人の心は機械とは違い、外部的な刺激との因果関係が不明確なので、他者からは理解できないということ。

問一〇 次のA～Eのうち、本文の内容と合致するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 9

- A 意味とは元来、生存にとって重要である、価値がある、と受け止められることにおいて発生するものであり、したがって、どんな生命体においても意味作用は発生する。
- B 理性の有無によつて人間と動物を区別するという考え方は近年では否定され、両者を区別する基準は、身体的な違い以外には見出されない。
- C 機械と生物は、システム論から見ると、「開いている」か「閉じている」かという大きな相違があるが、外部情報の処理の仕方においては変わるところはない。
- D 規則性があるように見える神経の働きも、身体内部で個別的・経験的に培われてきたものなので、その反応の仕方は合理的説明を徹頭徹尾排除する。
- E 人間は進化の過程で環境条件の多様な変化に複雑な仕方で対応しながら発達してきたので、人間の生命体としての反応にルールを見出してこれを定式化するのは不可能である。

〔IV〕

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

今は昔、天文博士安倍晴明といふ陰陽師有けり。古にも恥ぢず、やむごとくなりける者なり。幼の時、賀茂忠行といひける陰陽師に隨て、昼夜にこの道を習けるに、聊も心もとなき事なかりける。(略)

この晴明が家は土御門よりは北、西の洞院よりは東なり、その家に晴明が居たりける時、老たる僧來ぬ。共に十余歳ばかりなる童二人を具したり。晴明これを見て、「何ぞの僧の何より來れるぞ」と問へば、僧、「己は幡磨國の人に侍り。それに、陰陽の方をなむ習はむ志侍る。而るに、只今この道にとりてやむごとなく御座す由を承はりて、小々の事習ひ奉らむと思ひ給へて参り候つるなり」といへば、晴明が思はく、「この法師はこの道に賢き奴にこそ有ぬれ。それが我を試むと來たるなり。此奴に弊く試られては口惜かりなむかし。試にこの法師少し引き掬ぜむ」と思ふ。「この法師の共なる二人の童は識神に仕て來たるなり。もし識神ならばたちまちに召し隱せ」と心の内に念じて、袖の内に二つの手を引入て、印を結び、蜜に呪を讀む。その後、晴

明、法師に答へていはく、「然か承はりぬ。但し、今日は自ら暇なき事有り。速に返り給て、後に吉日を以ていませ。「習はむ」と有らむ事共は教へたてまつらむ」と。法師、「あな貴」といひて、手を押摺て額に宛て、立走て去ぬ。

「今は二町は行ぬらむ」と思ふ程に、この法師また來たり。晴明見れば、然るべき所に車宿などをこそそのぞき行めれ。のぞき行て後に、前に寄り來ていはく、「この共に侍つる童部二人ながらたちまちに失せて候ふ。それ給はり候はむ」と。晴明がいはく、「御房は希有の事いふ者かな。晴明は何の故にか人の御共ならむ童部をば取らむずるぞ」と。法師のいはく、「我が君、大なる理に候ふ。なほ免し給はらむ」と侘ければ、その時に晴明がいはく、「よしよし。御房の、人試むとて識神を仕て來たるが安からず思ひつるなり。然様には異人をこそ試め。晴明をば此せでこそ有らめ」といひて、袖に手を引入て、物を読む様にして暫く有ければ、外の方よりこの童部二人ながら走入て、法師の前に出來たりけり。その時に法師のいはく、「誠にやむごとなく御座す由を承はりて、「試み奉らむ」と思ひ給へて、参り候つるなり。それに、識神は古より仕ふ事は安く候ふなり。人の仕たるを隠す事は更に有るべくも候ず。あな忝。今よりひとへに御弟子にて候はむ」といひて、たちまちに名符を書きてなむ取せたりけ

る。

〔今昔物語集〕より

〔註〕

- 陰陽師……陰陽道（卜術・呪術の一種）に関することを司る者。
- 幡磨国……現在の兵庫県南西部。
- 識神……陰陽師に使役される下級の神霊。式神。
- 印……指で種々の形を作ること。印相。
- 町……距離の単位。一町は約一一〇メートル。
- 車宿……車寄せ。
- 名符……名札の一種。

問一 傍線部「む」と同じ意味を持つものを、本文中の二重線部イ〜ホの中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番

号は

10

- A イ
- B ロ
- C ハ
- D ニ
- E ホ

問二 傍線部2「由を承はりて」とあるが、ここでの「由」の内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマ

クしなさい。解答番号は

11

- A 能力が優れた人であること。
- B 怪しげな人であること。
- C 手に負えない人であること。
- D 近寄りがたい人であること。
- E 位の高い人であること。

問三 傍線部3「口惜かりなむかし」とあるが、その解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。

い。解答番号は

12

- A とても悔しがるだろうか
- B とても残念がるに違いない
- C きつと悔しがるだろうよ
- D とても残念なことだろうか
- E きつと残念なことだろうか

問四 傍線部4「もし識神ならばたちまちに召し隠せ」とあるが、そのように念じた理由を述べたものとして、最も適切なものを

次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

13

- A 相手の能力を確かめるため
- B 相手の真意を推し量るため
- C 相手の誘いにあえて乗るため
- D 相手の出方を探るため
- E 相手の企みを戒めるため

問五 傍線部5「手を押摺^{おしずり}て額に宛て、立走^{たはしり}て去ぬ」とあるが、このときの法師の心情を説明したものととして最も適切なものを、

次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

14

- A 自分の願いを聞き入れてもらえて嬉しいという気持ち。
- B 自分の思い通りにことが運んでひそかに喜ばしく思う気持ち。
- C せっかく清明に会えたのにまた出直さなければならぬという残念な気持ち。
- D 清明のおおらかな人柄に感銘を受けて高揚した気持ち。
- E 教えてもらう清明の技を真似しながら感じるうきうきした気持ち。

問六 傍線部6「然るべき所に車宿などをこそのぞき行めれ」とあるが、その解釈として最も適切なものを次の中から一つ選

び、その記号をマークしなさい。解答番号は

15

- A 晴明は、車が決められた場所に停められているかを見て歩くことにした。
- B 法師は、決められた場所に寄せた車の中からのぞき見ているようだ。
- C 童は、命じられた場所である車寄せにすでに到着しているようだ。
- D 法師は、人が隠れていそうな場所や車寄せなどをのぞきながら歩いてくるようだ。
- E 識神は、隠れるのに適切な場所である車寄せを探して歩いているようだ。

問七 傍線部7「安からず思ひつるなり」とあるが、それはなぜか。その理由を、「から。」に続くように十五字以内で答えなさい

(句読点も一字とする)。解答番号は

201

問八 傍線部8「人の仕たる」とあるが、この後に省略されている言葉を、本文中から抜き出して書きなさい。解答番号は

106

問九 次のA～Eのうち、本文の内容と合致するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

16

A 安倍晴明には賀茂忠行という優れた師がおり、つねに修行を共にしていたので、晴明は少しも心細く感じることはなかった。

B 法師は、安倍晴明のもとに二人の童部を弟子入りさせ陰陽道を習わせようとして、童部を従えて晴明の家にやって来た。

C 安倍晴明の様子を知ろうとして、法師は二人の童部を車寄せに隠して帰ったが、晴明は陰陽の術を使ってこれをすぐに見破った。

D 二人の童部が法師からはぐれていなくなってしまうが、安倍晴明の力により無事に戻ってきたので、法師はいたく感謝した。

E すでにある程度は陰陽道に通じていた法師であったが、安倍晴明の能力に大いに恐れ入り、正式に弟子入りを願ひ出た。

問十 次の中から『今昔物語集』と同じ時代の作品を一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は

17

A 更級日記

B 古事記

C 風姿花伝

D 南総里見八犬伝

E 徒然草